

ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者氏名：H・T様（30代 男性）

病名：左被殻出血

入院期間：平成30年11月上旬～平成31年4月下旬

経過：平成30年10月上旬に右片麻痺、意識障害、失語症でA病院に転院。降圧、止血療法施行も、血腫増大。10月上旬に定位的血腫除去術施行。意識レベルは軽快も、失語症と右片麻痺は残存し、ご家族の強い希望があり、11月上旬に回復期リハ目的で当院入院した。

内 容

入院時は、体格が非常に大柄で、JCSI-3、重度失語のため発語はなく、協力動作はあるものの全般的に重介助を要していた。入院時の脳画像でもまだ58mlの出血が残存していた。

FIMは運動項目26、認知項目12の38であり、わずかに協力動作がある程度の全介助レベルであった。

初回カンファレンスでは、予後予測が難しいなかで、目標を「6ヵ月間の入院で再発予防、随意運動が向上し、屋内外歩行修正自立、ADL修正自立、認知・高次脳機能の改善、発語での意思疎通」とし、当院での回復期リハビリテーションを開始した。

看護師ではコミュニケーションの模索と血圧のコントロール、体重の減量を行っていった。理学療法では長下肢装具を使用しての抗重力活動、車いす動作定着を進めていった。作業療法では起居動作、トイレ動作の検討、上肢管理指導などを行った。言語療法では言語理解の向上と表出方法の検討を進めていった。また、リハビリテーションが進む中で、看護師と協力しながら病棟でのコミュニケーション手段の模索や発語の促しを行いながら生活や適宜ご家族とも目標を共有しながら精神的フォローも行っていった。回復状況やADL状況を見極め、適宜介助指導を行い、ご家族と屋外の散歩や自主トレを行っていただいた。

退院時の患者さんの様子としてはJCSは正常となり、体重は15kg減の75kgとなった。単語レベルの発語は可能となり、経口摂取自立した。ADLも入浴含め、自立・修正自立を達成した。屋内移動は装具使用しフリーハンドにて自立、屋外移動は装具杖使用し公共交通機関も含め自立となり自宅退院を達成することが出来た。FIMは運動項目84、認知項目27の111となった。退院後に関しては当院の外來リハにて継続的にフォローを行っていくこととなった。

発症時87mlの出血量で入院時でもまだ58mlと出血が残存しており非常に重症な症例に対し、定期的に担当チームで進捗状況と目標の確認を行いながら、各部門が専門性を活かしたアプローチを行い協働し本人へ関わったこと、また、患者さんだけでなくご家族へのフォローも大切にしながら関わったことが、今回の回復や成果に重要であったのではないかと感じる。患者さん、家族含めたチームが一体となりながら、退院後の生活を共有することで、非常に重症患者さんであったが、在宅復帰に繋げることができたと考える。